

文部科学省受託事業

「社会教育活性化 21 世紀プラン」

県立生涯学習センターのこれから。

「市町村合併にともなう県立生涯学習センターの役割と機能に関する調査研究」

～市町村やNPO等と連携した広域的な社会教育推進システムの構築～



広島県社会教育活性化推進委員会（広島県立生涯学習センター）

生涯学習が目指すのは、地域(まち)づくりに大切な“元気な人づくり”です。
そこで、広島県立生涯学習センターでは...

住民が主体となって進めていくこれからの地域(まち)づくりには「元気な人づくり」を目指す生涯学習が大変重要になってきます。広島県立生涯学習センターでは、平成 16、17 年にわたり、市町村合併に伴う県内の生涯学習・社会教育活性化のための調査研究を行いました。1 年次は県内の公民館等社会教育施設に対する実態調査による、市町村や県民のニーズの把握、2 年次はその結果をもとに「人材育成のプログラム開発」と「事業評価の研究」に取り組みました。

1. 1 年次の調査研究から

生涯学習・社会教育に携わる職員たちの理想と現実とは？

現代的(地域)課題に対応する学習プログラムの開発や実施状況は、県全体でも高いとは言えず、特に中山間地域においては低いという地域格差が見られました。また、合併に伴ってこれまで築き上げてきたシステムや組織が変わり、サービスの低下や予算・スタッフ不足に陥るのではないかという不安を抱いており、地域間・地域内格差への対応や調整が急務と感じています。さらに、中山間地域では担当職員が少なく、学びあう機会がほとんどないことがわかりました。こうした現状から、

職員や地域リーダーには、



地域に向き合い、「地域の実態と課題をとらえる力」



「現代的(地域)課題に取り組む力」

が求められています。

能力開発への取り組みは？

「地域の実態と課題をとらえる力」に有効なのは、地域ベースの実践的研修次のプログラムづくりに生かせるよう、職員間での学びあいなどによる「自主的な学習」と事業の振り返り(事後評価)が重要です。

「現代的(地域)課題に取り組む力」に有効なのは、連携・協働意欲と能力開発地域団体・社会教育団体・NPO等の市民活動団体と連携・協働していくための能力開発のポイントは、他者と協力して事業を推進する力や人をつなぐコーディネート力、生涯学習・社会教育に対する使命感・情熱と将来ビジョンを持つことです。

だから、県立生涯学習センターでは



実践事例や経験を共有する(共に学ぶ)場づくり

地域のニーズに対応した学習プログラムの共同企画と
地域での実施および事業評価



地域格差の解消に向けた自主的学習会の支援

に取り組みます。

詳しくは、中国・地域づくり交流会「楽習の場づくり研究会」『市町村に対する実態調査報告書』広島県立生涯学習センター(平成17年3月)を御覧ください。

リーフレットができました。県立生涯学習センターは何をすることろ？

県立生涯学習センターの「仕事」を明示し、これから市町やNPO等と連携・協働による生涯学習を進めていくための第一歩として「あなたのやる気応援します。」と題したリーフレットを作成しました。

これまで以上に頼りがいのあるセンターを目指し、センター職員もそれぞれの専門性を高め、より積極的な働きかけのできるコーディネーターとなれるよう研鑽を積んでいきます。気軽にご相談ください。



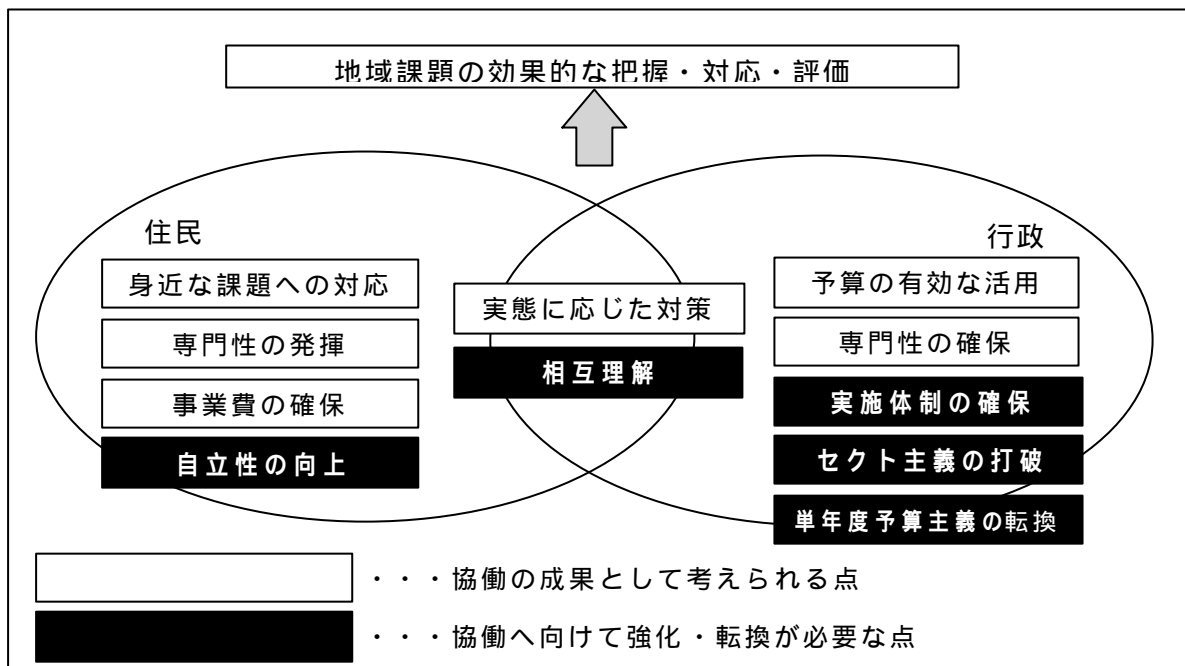
リーフレットは報告書とともに配布しています。

2.2 年次の調査研究から

協働の成果 人材育成のためのプログラムを開発

現代的(地域)課題の解決には、住民と行政がそれぞれのよいところを発揮し、弱いところを補い合う「協働」が効果的です(協働によってもたらされる成果と協働するために必要な強化・転換のポイントを整理したのが下の図です)

図-1



詳しくは報告書(理論編)の17~33ページをご参照ください。

モデル事業の実施

学習者・グループの「自立性の向上」に焦点を当てたプログラム

行政内部の「セクト主義打破」と住民・行政の「相互理解」に焦点を当てたプログラム

このようなプログラム開発の参考となる各地域での取組事例の収集を行い、協働事例シートを作成しました。詳しくは報告書(資料編)の1~25ページをご参照ください。

協働事例シートの例

協働事例	協働の目的	協働の経緯	協働の成果
佐東地区まちづくり協議会	地域課題の解決	協働の経緯	協働の成果

NPO法人 佐東地区まちづくり協議会

協働事例	協働の目的	協働の経緯	協働の成果
しまね子どもセンター	地域課題の解決	協働の経緯	協働の成果

NPO法人 しまね子どもセンター

協働による人材育成プログラム開発

その1「自立性の向上」

届ける学習機会を提供、「ラーニングネットふくやま」

学習機会への参加が難しい地域の住民の学習意欲を喚起するために、地域の大学と連携して「ミニ・ラジオカレッジ」を実施。これは自宅に「届ける学習機会」です。そのリスナーたちがさらなる学習機会を自ら企画・運営しようと「ラーニングネットふくやま」という組織を立ち上げました。

住民が学習者としてだけでなく、地域の生涯学習推進の担い手として自立して、必要な資金も自らの手で調達。講座を実施するにとどまらず、次の企画の芽を育み、協働する相手を探して次々と実施していく。まさに“芋ヅル式”の「進化する」人材育成プログラムを展開しています。



その2「セクト主義の打破」と住民・行政の「相互理解」

実現困難な“他部局との連携と住民との協働”に挑戦、「江田島市」

合併後のまちづくり事業について、生涯学習センターと江田島市の職員が協議を重ね、教育委員会をはじめ行政職員や地域リーダーなどさまざまな立場の人が集い、ワークショップを企画運営しました。ワークショップでは活発な意見交換がなされ、まちづくりの課題が明らかになり、参加者がその課題を共有することができました。

さらに、住民のまちづくり推進委員の意識が向上し、まちづくりの気運が盛り上がりとともに、次年度には企画振興課と生涯学習課が連携し、住民と協働してまちづくりに取り組むこととなりました。



モデル事業は、旧瀬戸田町、安芸高田市、府中市においても実施されました。

詳しくは報告書(理論編)47~54ページをご覧ください。

自分自身で振り返り，プログラムの見直し・改善も可能な事業評価 『評価ブックひろしま～パート1 参画者のために～』の開発

「評価ブックひろしま」開発の考え方

評価することそのものが「学び」につながり、評価主体者が学習者になりうるような評価法であること。

プログラム自体も進化・伸張していくような評価のあり方を模索し、開発過程でよりよい選択肢を見つけたら必要に応じて計画・実施・評価の更新も可能であること。

「評価ブックひろしま」の特徴

生涯学習プログラムの参画者(企画・立案者を含む)がそのプログラムを計画・実施・評価していく過程を自分自身で振り返り点検していく上で道標となります。

つまり、プログラムの適正な評価とともに、点検作業をしていくなかでプログラムのある部分に変更を加える必要性を感じたなら、計画や実施の途中であっても関係者・関係諸機関の協議のもとプログラムの見直し・改善を行うことが可能です。

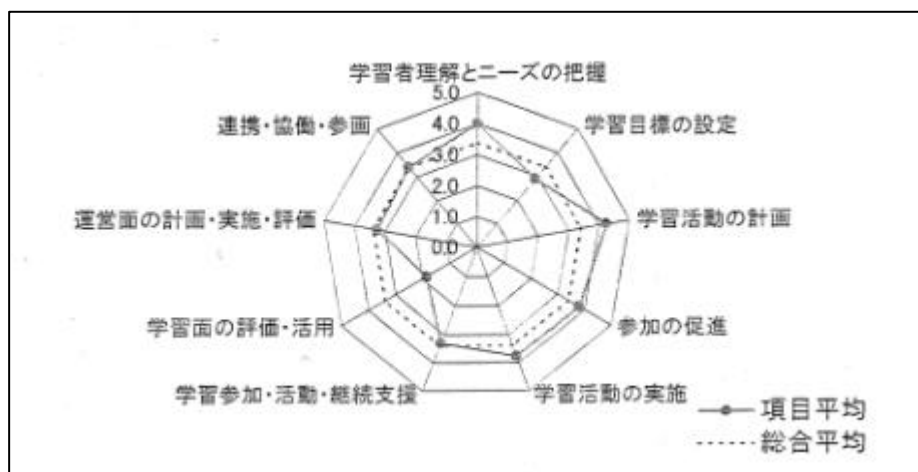
評価ブックの概要

最初にプログラムを書くためのシートを付けています。

プログラム開発過程に必須と思われる基本的な要素を8つに分類し、AからHのシートにしました。シートI以降は、プログラムの特性に応じて必要だと思われる要素・視点を点検者自身によって加えていくことができるようにしました。さらに、各シートには必須だと考えられる基本的な評価項目を掲げています。この評価項目もプログラムの特性次第で点検者により増やすことが可能です。評価項目にそってプログラムを点検することによって、プログラム開発が十全に行われているかどうかを確認できるようにしています。

この評価ブックは、エクセル画面で作成し、点検結果をレーダーチャートで表示、プログラムの改善をしやすいように工夫しました。

ホームページにも掲載しています。ご活用ください。



「全国生涯学習まちづくりフォーラム in 瀬戸田」の事例

レーダーチャートとは

縦軸の原点を中心の一箇所に束ね、放射線状に伸ばした「クモの巣」のようなかたちをしています。閉じた折れ線の内部の面積から、総合的な得点力を比較できます。さらに、折れ線の突出又は陥没の形状から、項目間のバランスが視覚的にわかり、特徴がつかみやすいという利点があります。複数分野の指標がある場合、項目間のバランスを表現するためには最適の方法です。

「評価ブック」の場合のレーダーチャートの見方

平均との比較で傾向を読む。

自分の平均点との比較により、相対的に自分の分野別の力の入りぐあい把握できます。ただし、平均点より高ければよいというものではなく、低かった項目は次回のプログラム実行時の留意項目と考えましょう。

他の事例との比較で傾向を読む。

自分が行った別のプログラムや同じプログラムで実施時期の違う場合の結果を比較することも参考になります。望ましいのは、どの分野もバランスよく得点が高くなっていくことです。記入者によって、得点のつけ方や平均点の傾向がちがいますので、単純に数値だけを他の人と比較をすることは無意味です。

詳しくは、報告書(理論編)34~46ページ、報告書(資料編)27~50ページをご覧ください。